発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町二
電話3033番
編集兼発行人　平島敏治

知識が増に従って
疑いが増してくる
ゲーテ

ボロを出した保守県政

副知事に横領の疑い

土屋知事に黒！焦慮の色濃し

昭和三十年四月公選知事第三代土屋県政が発足したが、戦後はじめて獲得した保守知事の座を守るため次々と大胆な行政を行い県政をロウ断してきたが、その性格は「秘密主義」「権力主義」で八年間の社会党県政時代の明朗さも、民主性も一挙に逆転し今日に至つた。

就任当初よりの議会与党工作、議長工作、副知事工作、無理を重ねた選挙戦、及び昨今狂的に実施されている土曜会（自民系、財界等の組織）かおる会（土屋夫人中心の婦人組織）等次期選挙対策等の政治資金が、県民の血税から捻出されているという「汚職うわさ」は公然の秘密として拡大されていた矢先、三月二十七日突然、副知事、出納長と県三役中二役が逮捕、拘留されるに至る。この県政はじまつて以来の未曾有の事件に対し、県民の汚職糾弾の声とともに、県総評を中心とする民主勢力と社会党は県政民主化、明朗化のためたちあがつた。

以下事件の概要と対策の第一次計画は阿具根参議、浦川県議、福岡県政審正対策委員会よりの資料による。

料亭舞台の暗躍

汚職事件の概要は

(1)昭和三十年十一月ごろ、当時経営状態悪化を続けていた東京神田神保町「第一相互銀行」の常務、根橋武男（四九才、元大蔵省銀行検査官、品川区大井伊藤町）は金融ブローカー向井利定の仲介で、県の歳計現金の予託を図り県に働きかけた。

(2)この話は赤坂の料亭夕霧等を舞台とし交渉、遂に県副知事山本兼弘（四一才）及び出納長、岩佐秀盛（五七才）は県信用組合理事長池田豊（六〇才）と共謀して、この申出に応じて同年十二月十日ごろから三千万円、三千万円、四千万円と三回に分け計一億円を県信用組合に予託し信用組合から更に第一相互銀行に一年間据置きの約束で流した

(3)このため第一相互から裏利子、若しくは謝礼金として一千万円が支払われ三百万円は東京で逐次消費され七百万円は福岡地場銀行（福銀幹部も仲介であるところから福銀と推定される）に送金、或る職員の名義で預金され、逐次消費されたもののようである。

(4)倘契約の一年後三十一年十二月までには一億円は返戻されたといわれているが、現在県信用組合に一億三千万円の預託があることをみても、三十一年三月決算期に一度返金の形をとり再び預託された疑いもある。

(5)三十一日の情報によると土屋知事も二千万円を共同消費していることが明かになつたらしい。

副知事、出納長を逮捕

第一相互銀行の不正貸付事件捜査中この事件が明らかになり、二月ごろより二回秘密裏に来福、三月二十四日に至つて東京地検特捜部大石検事ら数名が来福、逐次関係者二十数名を取調べ、この間野田俊作参議も参考人として出席したという話もある。

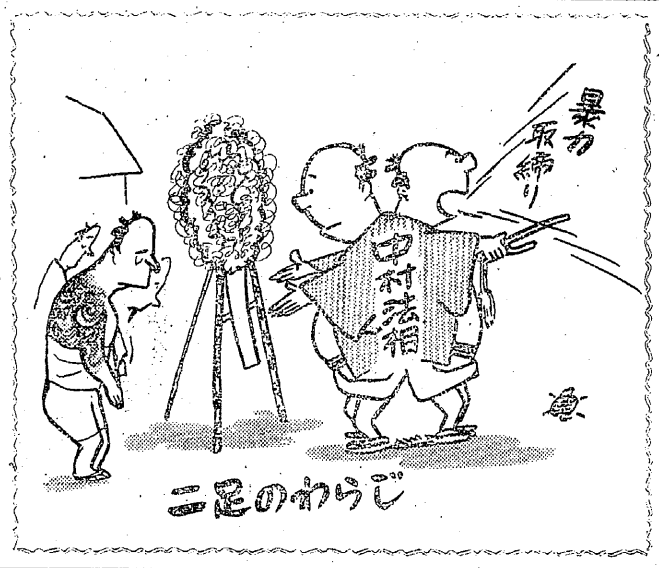
二十七日逆に山本、岩佐、池田、根橋、向井の五人が東京に連行逮捕され東京拘置所（小菅）に身柄拘束、東京地検難波検事らから取調べられている。

二十九日午前九時県庁内の知事室、議会事務局、秘書課、副知事室、出納長室、出納課、管財課、会計課、県庁信用組合、財政課、住宅課の十一カ所を大石検事以下三五名により一斉捜索され、ジープ四台に書類を押収された。

二十七日より関係課長等数名が調査され、大石検事は二十八日夕帰京、地元関係の捜査は福岡地検にうつされた。

小月部秘書課長、長沢住宅課長も参考人として近く呼ばれる。

罪名は未決定であるが、副知事側横領、銀行側贈賄の疑が濃い



前進

県庁汚職を洗え

福岡県庁に起つた一億円不正融資は山本副知事、岩佐出納長の検挙に伴つていよいよ本格的メスが加えられることになつたが、われわれは三百六十万の県民と共にこの事件が徹底的に糾明されるよう司直の決断を要求し、また県会内に設けられた特別調査委員会の活躍を期待するものである。殊にその裏利金として贈られた一千万円が暴聞うわさされているように土屋県政の与党多数派工作に使用されたり、選挙資金の後始末に使われたりしているとすれば、綱紀粛正も健全財政も望念どころか、泥棒会社に金を預けるようなもので、政治そのものに対する県民の不信を倍加することになるからである。

ところでこのような不正が跡をたえないことは今日では残念ながら国民の常識のようになつてしまつてその憤りも一時的、散発的に終ることが多くなつている。試みに会計検査院が一年がかりで調査した昭和三十年度の国や政府関係の検査の結果は二千百八十五件、金額にして六十六億千三百万円が北海道の対象になると発表されている。いまその片鱗をうかがうために一、二の例を挙げてみよう。

× ×

農林、建設、運輸の三省で交付した補助金は総額一千百三十一億円であるが、検査院が検査したのは総工事九万五千余箇所の中の八パーセント、一万一千箇所に過ぎない。そしてその中で発見され返納、あるいは減額させられた数は一千百三十七件、三億六千万円に達している。まさに氷山の一角とはこのことであろう。この外に防衛庁の物資調達をめぐる不正事件は既に既きあきる程のことだし、国有財産の処理や食糧管理の不正も枚挙にいとまがない。

このような金が細大もらさずわれわれ国民の血税によつてまかなわれている事を思えば、われわれはこの種の事件にもつと関心を持つていゝ筈ではないか、前記摘発された六十六億余の金にしても検査院の眼にふれたごく一部に過ぎない。一兆円予算の全部について検査されたとしたら一体どんな数字が出るであろうか。三十年度予算のうちわけは最高が所得税の二千七百八十六億、二位が法人税の一千九百二十一億、三位が酒税である。しかも最高の所得税の内訳は源泉徴収が二千百四十一億、申告納税が六百四十五億、われわれ勤労者階級がウムを云わせず給料袋から天引きされる金は実に所得税の七十七パーセントに近い額である。

数字の羅列に終つたがこのようなお粗末な政治の機構と運用に国民は無関心であつてはならない。不正を追及する多数の声が線香花火に終るから不正は跡をたゝない過失や手違いならともかく、今次の不正は徹底的に追及して責任を明らかにしてもらいたい。

「知らぬ、存ぜぬ」の知事

三月初めより開会中の定例議会は最終日の早朝このことを知るや、がく然となり各党対策を進めた結果、小宮県議（大牟田出身、社会党県連会長）が緊急質問に立ち、知事の責任を追及、事態の明確化を要求したが、知事は「知らぬ、存ぜぬ」の一点張りであつたが、そのあと特別調査委員会設置の動議は四十七対二十一で自民党のみが反対し決議された。

特調委のメンバー（十三名）

社会党（四名）
小宮市太郎（県連会長、高教組大牟田）高口等（幹事長、炭労物手）豊沢雪雄（製鉄、八幡）浦川守（炭労、大牟田）

自民党（四名）
右左衛門（民主系、門司）井上半蔵（自由系、小倉）小田泰三（民主系、くら手）
公正会（三名）準与党中間派
屋家幸正（中間派、筑上）佐藤徳太郎（革新系、浮羽）田中義忠（農協系、八女）
新正会（二名）与党
花田二百（小倉）松本松枝（山田）

保守党にヒビ入る

知事は当初より全然知らぬ、関係がないの一点張りであり、事件にまきこまれるのを極度に警戒しているが、逐次事態が県民の前に明らかになるに従い焦慮の色が濃くなつている。一方副知事、出納長はすでに夫々辞表を提出しているが、知事のもとには正式にとどいていない。

昨年初めごろより小林議長（自民党自由系）を除き、選挙当時の自由系接近が逆に民主系接近となり、自民党内部もうまくゆかず、与党新正会も特別調査委設置に賛成する等与党体制もくずれ去り、選挙基盤として強化をつづけてきた前記、土曜会、かおる会もその基礎が危くなつた模様である。

汚職、糾弾に・県民起上る

以上述べたのが大体の事件の既要と検察庁、知事側の動きであるがこれに対し社会党県連は真相糾明のため県会に特別調査委設置に成功した。

県総評は二十八日緊急対策会議を事務局で開催し今後の対策を協議し、二十九日久留米で県下各地区労連絡会議を開催するとともに単産代表者会議も開き知事及県議に次のような公開質問状を発した

知事に対して

(1)責任の所在について
(2)副知事、出納長の処分について
(3)一千万円の使途について
(4)政治的良心について

議員に対して

(1)特調委設置えの賛否
(2)各地区県議報告会の賛否
(3)知事の責任の所在

三十日は労組農民団体等三千名が県庁前広場に参集し「土屋県政汚職糾弾県民大会」を開催し成功した。

汚職摘発乗出す

県庁の地元である、県職組は二十七日直ちに宣伝活動をはじめ、緊急執行委員会を開き「絶対に許されない、悪陣を要求する」旨の声明書を発し、二十九日拡大闘争委員会を開き、春闘組織を汚職摘発組織に切換え本事件外の汚職事件も摘発することを決定し、準備を進めている。

国会は土屋知事喚問え

中央では福岡県出身の衆、参両議員が三月三十日第一回、四月一日第二回と、当不祥事件の糾明についての協議を重ね

安藤寺県職委員長が事件の概要と地元闘争方針を説明、これを検討の後中央の対策としては

(1)当不祥事件を追求出来る委員会は、地方行政、決算、大蔵の各委員会であるところから、夫々検察庁と相い呼応して土屋知事を喚問し真相を追求する。時期等については地元とよく連絡をとる。

(2)四月二日青野委員長（福岡二区社）のもとに決算委員会を開催して田中自治庁長官より、当事件の内容について説明を求め質疑を行う。

(3)土屋県政の政治的責任を喚起する意味等を含めて、委員会より現地調査を行う（参議院に可能性あり）

等々を決定し次回は公報で連絡することにして散会した。

座込みの自民党

決算委員長青野武一氏は、坂本泰良（熊本一区）吉田賢一（兵庫）淡谷悠蔵（青森）の各社会党委員とスクラムを組み、福岡県公金不正流用事件にかんして土屋知事を参考人として喚問することを決定して、決算委員会に持込み、五日午後五時よりの理事会で話合つたが、自民党側理事は土屋の黒をカクスためか態度保留した。六日もひきつづき協議する。

埋つた西川（三）

三川志太　久本慈悠一　画

「俺が一番最初色町に行つたのは十七の時ちやつたけん、もう二十年以上前んこつたん。なにしろ初めてちやけん、ぶるぶる慄いがとまらんなこまつた。女どが早よう乗らんねといつたもんで、女の腹の上に乗つたと思つたら…あつという間もなかつた。女のへその下にべつとり出とつたたん」

西川も思わず苦笑した。

「お、西川も笑つとるぞ、やつぱりわかるそなたい」とひげ面の男がからかつた。

「あー、俺も人間ぢやけんな」西川は笑いながら云つた。西川は社宅に帰つてからも、滅多に外に出たことがなかつた。それでどんな人が近所に居るか、よくは知らなかつた。

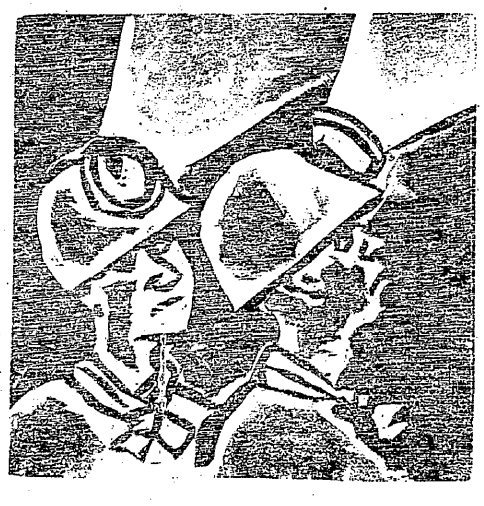
妻が話すことで知る位のものだつた。近所では「西川さんな、腕もよかし、よくがまださすので、もう保安係にならすだろう」とか「もう四、五十万な貯めらしたろう」とうわさされていた。が、西川の両親は田舎に住んでいるので仕送りもせねばならぬし、妻と子供二人あり、生活は楽ではなかつた。

「ジー、ジー」

休憩所のベルが作業始めを報せた。

「これで第一巻の終り」と云つて岩田が立上つた。

「岩田先生、また昼にお願いします」



ニキビ面の男が子供のような声を出した。

「よし、よし。よか話ば聞いたけんちゆうて、怪我すると出来んばい」笑いながら答えた。

みんないまいましそうに、ベルに一べつをあたえて出ていつた。

岩田は声をあげて切羽を見つめていた。

「うわー、柱は折れてしもうて、まともな枠はなかたい」

「こんかところでは仕事はされんばい」と二人が西川の方へ振返つた。

「掘つてしまうとあとは搗いなし で、俺達のことは一つも考えとらん」岩田はぶつぶつ云つた。西川は岩田の目と合うと

「ほんなこてな―」と何か重い気持ちになつた。

「それは十数年の間云いたいことも云えず、ただ仕事して来た自分が、非難されているように感じる気持ちだつた」後山が云つた。

「西川さん、係員に云うてこんな」と西川は後山の声を聞いて、重い気持ちはなくなり、勇気が湧いてくるように感じた。

「よし、云つてやろう」と身震いした。が、現在の生活を思うと踏切れず

「早うやつてしまおうか」と云つて切羽の中へ行つた。

「西川さんが少しやかましく云うと、きくるばつてんな」

と西川を見ながら不満そうだつた